稱讃

二七七号

二〇二六年一月一日発行

人身受けがたし、今すでに受く。仏法聞きがたし、今すでに聞く。この身今生において度せずんば、さらにいずれの生にむかってかこの身を度せん。大衆もろともに至心に三宝に帰依したてまつるべし。

みずから仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して無上意をおこさん。

みずから法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、ふかく経蔵に入りて智慧海のごとくならん。

みずから僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して一切無礙ならん。

無上甚深微妙の法は、百千万劫にもあい遇うことかたし。われ今見聞し受持することをえたり。願わくは如来の真実義を解したてまつらん。

（『浄土真宗本願寺派日常勤行聖典』より）

歓喜賀慶

謹んで　新春のお慶びを申しあげます。

二〇二五年十二月十四日（日）
稱讃寺　宗祖親鸞聖人報恩講

当日は、あいにく、お天気はよくありませんで、仏旗を屋上に掲げませんでした。

久しぶりに空席なく満堂になりました。（八席しかありません）

門徒さんの安達さん、中木原さん、早崎さん山田さんに、ご縁のあった根岸さん、ビハーラ会員の山下さん、佐藤さん、そして、故長島さんのご長男さんが、お参りしてくださいましたようこそ、ようこそ、お参りくださり、ありがとうございます。

正午お集まり頂き、築地本願寺「紫水」の赤飯御斎弁当に白味噌汁、栃木南組妙傳寺様から頂いた苺をデザートに添えて、ご一緒にご馳走になりました。

午後一時より独自に略した「旧御本典作法」を独唱し、その間、皆さまには御尊前、祖師前にてお焼香していただきました。

三奉請の後、「正信念仏偈」行譜・ご和讃六首引きを一堂で読誦いたしました。

住職が法話をさせていただき、恩徳讃を唱和いただき、茶話会を催して、散会いたしました

十六日の「のんのん法話会」には戸谷さんが始めてご参拝くださいました。

発行　浄土真宗本願寺派　稱讃寺
〒一二二―〇〇七五
東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号
TEL　〇三―五二四二―二〇二五
FAX　〇三―五二四二―二〇二六
HP　shousanji.com
メール　shousanji@festa.ocn.ne.jp

また、事前に、髙橋さんが、当日参拝出来ないからとお参りにきてくださいました。報恩講後日には、別の髙橋さんがお米をお届けにお出でくださいました。

住職の話は、「報恩、報謝のお念仏」と言われてきたが、親鸞聖人は〝報恩〟とは〝恩に報いる〟とは読まれておらず、〝恩を報ずる〟〝恩を報いる〟と読まれている。

報恩講は、親鸞聖人のご遺徳を偲ばしていただき、この私にお念仏の教えを伝えてくださったことに感謝し、わが身を省みる(慚愧)する法要であると聞き習ってきたことであります。

あえて、〝報〟とは〝むくいる〟と大体読まれるが、〝報道〟の〝報〟のように〝告げ知らせる〟の意があります。

〝恩返し〟など出来ないのが、凡夫だと言われながら、親鸞聖人の〝恩に報いる〟ことは可能なのでしょうか。不可能だから、〝報恩〟の思いを持つ必要がないと言っているわけではありません。

阿弥陀さまの大慈悲を感じることのできない私たちでありますが、その大慈悲を味わわれた方々(七高僧、親鸞聖人)が遺された多くのお言葉が、教え伝えようとしてくださっている。そこから、阿弥陀さまの大慈悲が今、私に働いていると聞き続けることが、〝報恩のお念仏〟というのではないでしょうかと言うことをお話しさせて頂きました。

また、冒頭で、『〝このことひとつ〟という歩み 唯信鈔に聞く』(宮城顕氏著)、聖覚法印の『唯信鈔』を通して親鸞聖人のお心に臨まれた書物に書かれていたことを紹介いたしました。

「仏・法・僧の三宝に帰依する」ことは、仏教の根本であります。

私は、仏・法・僧は、仏は阿弥陀さま、法は阿弥陀さまのご本願の教え、僧は僧伽(サンガ)のことであり、この三つは並列に位置づけられていると思っていましたが、宮城先生はそう捉えられなかった。

「仏・法・僧と三つ横にならんでいるのではないのです。つまり、仏法というものを破って出るという形で、僧宝があるのです。つまり僧宝というのは異質な存在。ですから僧宝のあり方において、その仏法というのが問われてくるのです。僧宝というのは、僧伽とも言われるわけですけれども、もちろんこの僧は、いわゆる僧侶ではありません。僧伽ですけれども、どうもへたをしますと、その僧かを自己完結したものとして固めようとする、あるいは固執しようとする私たちの意識があるのです。つまり、僧伽を信順者の集まりと考えて、それで固めようとするのです。しかし信順者だけが集まってそういう信順者の集まりを僧伽と言うなら、僧伽というのはまことにやせ細ったものでしかありません。どれほど組織として強大になろうと、狭いものになり広がりなく終わるのでしょう。」と。私自身、全く、そのように〝サンガに帰依する〟ことの意味を捉え切れてなかったことに、頭を打たれた思いをしました。

ただ〝お念仏の仲間〟に帰依するではないのですね。〝御同朋〟＝罪悪深重の凡夫の〝我ら〟との意識と他をリスペクトすることをあらためて認識していくことも報恩講のご縁に遇うということなのでしょうか。

特集　金子大榮師のご領解 ⑯

『親鸞の人生観』
教行信証真仏弟子章

金子大榮　法蔵館　一九六六年初版

十六　摂取と証誠

本　文　またいはく、弥陀の身色は金山のごとし、相好の光明は十方をてらす。ただ念仏するものありて、光摂をかふる。まさにしるべし、本願もともこはしとす。十方の如来、みしたをのべて証したまふ。もはら名号を称すれば、西方にいたる。かの華台にいたりて妙法をきく。十地の願行、自然にあらはる、と。

口語訳　またいう
おんはだいろは　金のごと
み光よもを　照らしては
御名よぶものを　摂めます
弥陀の誓の　大いなる
よろづの仏　舌をのべ
西ゆく道を　あかします
華のうてなに　法きかば
願は自然に　あらわれん

一

これも『往生礼讃』の偈である。善導は『観経』において自身の道を見出された。この偈はとくにその『観経』のこころを歌われたものとみてよい。そのうち、前半は阿弥陀仏の光をたたえ、後半は浄土の徳をのべられたものである。しかしてそれで『観経』の説が総括されているのである。

「弥陀の身色は金山のごとし」というは、衆生の業苦を照見したもう大悲の光は、ただ仰ぎみるの他ないという形容であろう。その相好の「光明は、遍く十方を照らし、念仏の衆生を摂取して捨てたまはず」と経説せられてある。それは何故であろうか。善導はそれを「まさにしるべし、本願もとも強き」によると領解せられた。しかれば念仏するものが摂取の光を蒙るという事は本願の理によるものである。如来はその本願により摂取の光となりて念仏する者のうえにあらわれられるのである。

したがって如来の存在というも念仏のほかに感知せられるものではない。念仏はこれ如来の現身である。それは衆生を摂取して如来自身を示現せられたるものである。だからこの念仏においてのみ、如来は如来であり、衆生は衆生であることがおもいしられる。しかしてそれがそのままに如来のこころは衆生に徹し、衆生のこころは如来の大悲を感じているのである。しかしこの交感を成立せしめるものは、すなわち弥陀の本願である。衆生が往生せずばわれも仏とはならぬという本願は衆生が南無の機とならぬかぎりは、如来も阿弥陀仏とはならないということである。

その本願によって南無阿弥陀仏という法が成立しているのである。したがってその本願を知ることは、かえってまた念仏によるといってよいのであろう。それによって「摂取不捨の本願」（『歎異抄』）とも説かれたのであった。

二

ここでわたしは仏教はすべて本願を信じ念仏するところに摂まることをあきらかにしておきたい。仏教は釈迦の創説である。その釈迦の原始の教説は四諦・八正道ということであった。しかるにその四諦とは、生は苦であり、苦は愛（集）に依る。だから苦を滅（涅槃）するためには八正道を修行せねばならない。それは諦らかなる真理であるということである。しかれば四諦というも、要は人間の業苦を自覚して涅槃の浄楽をもとめようと教うるものに他ならない。さればこそ八正道というは八向涅槃道であると説かれたのであった。

しかるに真宗における念仏とは、業苦の人生にありて涅槃を願うものに他ならぬのである。「念仏者は無礙の一道なり」といわれる。その無礙道とは「生死すなわち是れ涅槃なり」と知らしめるものである。しかれば八正道というも念仏のこころに行われるものであろう。念仏はこれ正見であり、正思であり、正語であり、正

業であり、正命であり、正精進であり、正念であり、正定である。そのうち称名は正業であり正念であることは、浄土の祖師たちによりてもつねに説かれたことであった。これすなわち八正道というも、念仏にそなわるおのずからなる功徳であることをあらわさるるものである。

その原始の教説が展開して、大乗仏教となった。しかして、その菩薩道としての六波羅蜜というものも、また念仏の功徳に摂まるものである。そのことは正に「勝れた功徳」（第六講）として領解せることであった。しかし原始の教説がどうして大乗仏教を展開したか。そこにはいかにして出家の僧と在家の信者との別を撤廃するかという課題があったようである。その課題が解答されなければ、仏教は普遍性をもたないものとなるであろう。涅槃を願うこころは在家にありても深いものがある。しかればその涅槃を求めるものは、出家の僧にかぎらないものではないであろうか。

『華厳経』に説かれた財前童子の五十三人の善知識の大多数は在家の求道者である。それぞれの日常生活をもって普賢行とするものである。それらの人びとは分限の生活をたのしむほかに仏道はないと身証しているのである。『維摩経』では「維摩居士」に対しては、出家の僧侶にも、不徹底のものがあるとさえいおうとしているのである。その在家仏教の例は『勝鬘経』の勝鬘夫人の十大受にも、『法華経』の地涌の菩薩の証明等にもみられることである。こうして大乗仏教は僧俗の別を撤廃せるのであった。

しかるに在家とは現に業苦の生活のうちにあるのである。しかも仏教の信者であるかぎり涅槃を求めているのである。そこから「智慧あるが故に生死に住せず、慈悲あるが故に涅槃に住せず」ということが菩薩精神であると説かるることとなった。まことにそれこそ聖道というものであろう。されどそこにはわれら凡夫のおよばないもののあることが感ぜられる。われらにあるものは、ただ業苦を離るることのできぬ悲しみにおいて涅槃をもとめ、その涅槃の光に照らされて人生を過ぐる他ないのである。したがって「煩悩を断ぜずして涅槃を得る」ことも、ひとえに如来の智慧と慈悲とによるのである。しかしてその慈悲と智慧とを感知せしめるものは、ただ念仏である。ここに至りては、八正道も六波羅蜜も修行し得ないものにも涅槃への道があたえられていた。それが往生浄土の法であったと思いしらねばならぬのであろう。それではじめて仏教は一切の衆生を救う普遍の法であることがあきらかにせられたのである。

三

しかれば念仏成仏は真宗とよばれている一宗派の教ではない。仏教といわれるものの体が念仏である。真宗とは仏教の真実の宗旨であるということである。したがって弥陀の本願というも仏陀釈迦の根本精神にほかならぬのであろう。一切の衆生をことごとく涅槃の境地にあらしめたいということこそ、仏陀といわれるものの無限無窮の願であるからである。しかれば仏法とは何ぞやの問に答うるものは、南無阿弥陀仏という念仏であり、仏陀とは何ぞやの問に答うるものは、如来の本願の他ないのである。

しかるに原始の仏教が大乗菩薩道を展開せることは、同時に仏陀とはいかなるものであるかという課題に応答するものであった。釈迦入滅の後、そのゆくえをたずねる遺弟のこころはあたかも親を失える子の親を思慕するようなものであったのであろう。そこから現われたものは法のなかに仏を見出すべきか（法中有仏）それとも伝統の僧のなかに仏を見出すべきか（僧中有仏）ということであった。しかして教団の長老は、主として僧中有仏の意見であったということである。釈迦は仏陀であったにちがいはないが仏陀は釈迦のみではない。しかれば釈迦の精神を継がれたものは、みな仏陀であるといってもよいのであろう。ここから師資の相承が、仏々相伝であるといわれることにもなったのである。

これに対して信者の大衆を代表するものは、法中有仏と唱説したということである。「汝等展転して道を行えば、如来の法身には常に在りて滅びない」（『唯教経』）ということは、釈迦のこころである。しかれば釈迦の亡きあとを慕うものは、その教法のうち仏陀を見出すの他ないのであろう。それは教法のうえに仏陀の智慧と慈悲とを感知することである。その智慧、

慈悲というものには、おそらく釈迦在世の弟子たちにも思い測られなかったほどの深いものとして追慕せられたことであろう。ここには僧中有仏の仏と、法中有仏の仏との違いがあったにちがいない。前者の仏は現実にある人格的聖者であるが、後者の仏は永遠不死なる如来の精神である。その智慧、慈悲は仏陀を思慕するものに取りては、無限の光と命として感知せられるものである。それこそ阿弥陀と呼ばれるものではないであろうか。

こうして見出された阿弥陀の願いは、一切の衆生を一人も残らず涅槃にあらしめたいということであらねばならない。その如来の本願を開顕せるものこそ『大無量寿経』であった。したがって人間界に出現せる釈迦の本地(根本境地)は阿弥陀の本願にありということも、頷かるることである。独り釈迦だけではない。すべての仏と呼ばれるもののこころは阿弥陀の本願であるといわねばならぬのであろう。

四

こうして本願を信じ念仏することが、仏教の真実であることは明知せられる。しかしそれは地上にあらわれたる歴史的事実ではない。したがって原始仏教から大乗仏教を経て浄土真宗となったという学者の研究は十分に尊重せねばならぬものであろう。山奥の木の下つゆが、流れ流れて、ついに大海に注ぐ河川となるその間の風光を展望することは、われらの精神生活を豊かにするのである。されど、われらは、その根底には地下に流るる水あることを忘れてはならない。たとえ地上の河川には断続があっても、地底の流れは一味相続して断えることはないのであろう。「本願を信じ念仏もうさば仏になる」ということは、その地底の流れを掘りあてたものではないであろうか。『大涅槃経』には「如来の法身は常にあり」といい、「一切の衆生には悉く仏性あり」と説かれている。その常住の法身は無倦の大悲となりて悉有の仏教は群萌の大地から湧き出でて称名念仏となるのである。ここに仏教の歴史の底を流るる真実があったのである。

五

ここで『往生礼讃』の本文にかえる。「もはら名号を称すれば西方にいたる」といってある。その西方とは日没の方処に寄せて、人生の帰終である涅槃界を思慕するものである。だからそれは浄土広大にして、本来無東西であるという道理に反くものではない。かえって「西ゆく道」として人生を超越せる彼岸の世界への往生が願われたのである。

したがって「かの華台にいたりて妙法をきく」ということも、ちかくは念仏においても本願のこころを聞くことに他ならぬのであろう。そこことばからいえば華台は浄土のものであるにちがいはない。しかし浄土のさとりを何故に蓮華の上に生まるると説かれたのであろうか。煩悩具足の凡夫が念仏することは、泥のなかから蓮華の生ずるがごとしと喩えられている。しかれば念仏者の感ずる浄土こそ蓮華蔵世界といわれるものなのであろう。

この世にみ名を称うれば
　かの世に開く蓮の花
この世のいのちおわるとき
　かの花きたり迎うなり

と歌われた。その彼の世の徳を内感するものは念仏の他にはない。したがって浄土にいたりて聞かるべき妙法も念仏のこころに受容せられるのであろう。蓮華台とは念仏者を象徴するものであるからである。

その妙法はすなわち本願のいわれである。だから、そのいわれを聞信するものには、「十地の願行自然にあらはる」るのである。その十地の願行は聖道として長時に修せられるものである。しかるにその初地は歓喜地であるから信心歓喜の境地である。また六波羅蜜が十地の願行であるということであるから、これまた念仏にそなわる功徳として説かれているものである。特に第八地以上には普賢の行徳というものが現われるものであるが、それは念仏の信心における還相利他の徳として廻向されるものである。こうして本願力廻向による行信には大菩薩の道が自然に円融しているのである。しかしてそれゆえに念仏者は真の仏弟子と呼ばるるのである。

浄土真宗のビハーラケアを考える

第5章　アジャセ王の救いの過程

3　よき友とよき師との邂逅

この物語で明らかになったことは、救いの成就が善き友と善き師との出遇いによってもたらされるということである。すなわち、阿闍世と耆婆と釈尊との、相互の親密な人間関係が育まれることによって、阿闍世は自分自身を見つめなおすことができた。縁起的な人間関係、それが心の絆を育むのである。

耆婆は、罪を感じている阿闍世王に対して、罪深い提婆達多を救った釈尊に会うことをすすめ、また父、頻婆沙羅も、天からの声となって、

「王の悪業からなず勉るることを得じ。やや願はくは大王、すみやかに仏の所に往づべし。仏世尊を除きて余は、よく救くることなけん。」

（信巻　註釈版聖典276頁）

〈現代語訳〉

「アジャセ王の悪しき行いの報いは、決して逃れることはできない。どうか大王よ、速やかに仏のもとへ往くがいい。仏の他には、誰もそなたを救うことはできない。」

といい、釈尊も、阿闍世に対して、こう語っている。

「一切衆生、阿耨多羅三藐三菩提に近づく因縁のためには、善友を先とするにはしかず。」

（信巻　註釈版聖典280頁）

〈現代語訳〉

「どのような人々でも、さとりに近づくには、まずよき友を縁とするのが一番である。」

すなわち、耆婆のような「よき友」にめぐりあうことが、苦しみをのりこえるために大切なことであると、釈尊はいうのである。

犯した罪は、自分独りで、真正面から受け容れることはむずかしい。どうしても自分の罪を言い逃れたようとしたり、罪を覆い隠したり、自分を弁護しつづけたりするからである。罪を罪としてありのままに受け容れることができるのは、罪を感じている自分を、まるごと受け容れてくれる存在に出あったときである。その存在が、耆婆であり、釈尊であり、さらには、愛と憎しみの間を行ったり来たりしながら生きているのが、人間である。自らが大きな苦しみを抱いたとき、そのまますべて黙って受けとめるような存在のいることが、重要である。縁起的な支えあいのなかで、人は自らの愚かさをありのまま知っていくことができるからである。

それでは、父を殺して悩む阿闍世は、どのようにして身心の安らぎを見開いていったのであろうか。

4　慚愧

耆婆は、罪にもだえる阿闍世にこう語った。

「善いかな善いかな、王罪をなすといへども、心に重悔を生じて慚愧を懐けり。大王、諸仏世尊つねにこの言を説きたまはく、二つの白法あり、よく衆生を救く。一つには慚、二つには愧なり。慚はみづから罪を作らず、愧は他を教へてなさしめず慚は内にみづから羞恥す、愧は発露して人に向かふ。慚は人に羞づ、愧は天に羞づ。これを慚愧と名づく。無慚愧は名づけて人とせず、名づけて畜生とす。

（信巻　註釈版聖典275頁）

〈現代語訳〉

「善いことを仰せになりました。阿闍世王は、罪を作りましたが、深く後悔して慚愧の心を抱いておられます。阿闍世王よ。仏がたは常に次のように説いておられます。二つの清らかな法があって、衆生を救うことができます。その法とは、一つには慚であり、二つには愧であります。慚とは、自分が二度と罪を作らないことであり、愧とは、人に罪を作らせないことです。また慚とは心に自らの罪を恥じることであり、愧とは、人に自らの罪を告白して恥じることです。また慚とは、人に対して恥じることであり、愧とは、天（世界）に対して恥じることです。これを慚愧といいます。慚愧のないものは人とは呼ばず、畜生と呼びます。」

まず耆婆は、阿闍世が、「罪のない父を殺したことを後悔し、重い病にかかり、罪に苦しみ、地獄に堕ちるに違いない」と、打ち明けるのを聞いて、「よいことを仰せになられました（善哉善哉）」と答え、「罪を深く悔いて、慚愧することが、人として生きる道である」と説いた。

慚愧（Repentance）とは、次の通りである。

●慚（Shame）

自分が二度と罪をつくらない。

心に自らの罪を恥じる。

人（相手）に対して恥じる。

〈自己への愛情〉

●愧（Self-reproach）

人に罪をつくらせない。

人に自らの罪を告白して恥じる。
天（世間）に対して恥じる。
〈他者への愛情〉

このように、罪を感じている時には、自らの罪の事実を無視し、他人に転嫁しても、何の解決にもならない。自己を偽ることで苦しみが増すだけである。

救いの最初の過程において重要なことは、自らの罪を罪として、まっすぐに自覚し、心の底からありのままに謝罪するということである。それはまた、被害者にとって最も重要である。

ここで、罪を自分のこととして引き受ける覚悟をもつ重要性を明らかにするために、六人の大臣と耆婆の態度を比較してみたい。

六人の大臣がそろって阿闍世に話したことは、「そんなに深刻に悩まないでください。悩めばより愁いは深くなります」「王には罪はありません」「地獄など存在しません」といった助言であった。それらの助言は、阿闍世自身が感じている罪や地獄意識を、一時的に軽くさせたかもしれない。しかし、物事の本質を見ず、人を傷つけたという現実を忘れさせ、無視させるようにするだけである。またその大臣たちの助言は、阿闍世の心の奥底にある、罪を認めたい気持ちにそったものではない。

これに対して、耆婆は、阿闍世自身の罪意識の芽生えと後悔をそのまま意味づけた。素直になること、謙虚になること、ごまかさずに内省すること、それが罪を犯した人間の、人として生きる第一歩である。慚愧は滅罪を目的とした行為でもなければ、救われるための条件ではない。滅罪という見返りを求めて、慚愧するのでは決してないのである。

慚愧そのものは自己を知り、他者を思いやること、真摯に生きることそのものである。罪は罪として自分自身が感得していかなければならない。すなわち、慚愧は、救いのための通過儀礼でもなければ、罪を滅するためのものでもなく、一生涯、一貫してつづき次第に深まっていく。

それについては、阿闍世がついに、無根の信をおこした後においても、

「われ悪知識に遇うて、三世の罪を造作せり。いま仏前において悔ゆ。願わくは後にまた造ることなからん。」　（信巻　註釈版聖典289頁）

といっているところに明らかである。無根の信を得るということは、阿闍世が仏の前で、真に慚愧し、心から慚愧することであった。したがって、阿闍世の慚愧は、父を死なせてしまった直後に始まり、ついに仏の願いが阿闍世に満ち満ちて、阿闍世の心に、無根の信が開かれた後も、一貫してつづき、次第に深まっていくのである。慚愧そのものは、折に触れながら、生涯にわたって深められ、二度と罪を犯さないという願いになりながら、犯した罪を忘れずに生きていくことを意味している。深い反省が、自己と他者への愛情を育むのである。

5　父の声

慚愧をはじめた阿闍世に、そのとき、父、頻婆沙羅王の天からの声が聞こえた。「阿闍世王の悪い行いの報いは、決して免れることはできない。速やかに釈尊をたずねてほしい」という父の声である。この天からの声は、阿闍世自身の心の底で感じていた父から受けた愛情が、声となって表に現れたのであろう。阿闍世は自分のほうから、怨みを両親にぶつけた。

一方、母韋提希や父頻婆沙羅も、子よりも自分の身を案じ、我が子を自分の道具のように扱ったこともあった。しかし、母韋提希も父頻婆沙羅も、子を憎まず、むしろいつも子の身になって心配してくれていたことを、父が亡くなった後になって、阿闍世は身にしみて気づいた。こうして、阿闍世は、両親からの愛情を受けていたことを改めて実感し、より一層、自分の罪深さを知って、全身が大きく揺れ、病の瘡が増大して、大地に倒れてしまうのである。

自分が傷つけた相手と真正面から向き合うことは、どんなにつらくても通らなければならない道である。傷つけた相手に対して、身にも心にも悪かったと感じて詫びること、それが相手にとっても自分にとっても大切である。いかなる理由があろうとも、相手を傷つけた時には、自分の思いを捨て、被害者やその家族の悲しみを知ることが不可欠である。

『アジャセ王の救い　王舎城悲劇の深層』
（鍋島直樹氏著）

「慚愧は滅罪を目的とした行為でもなければ、救われるための条件ではない。滅罪という見返りを求めて、慚愧するのでは決してないのである。」と聞いて、何事も見返りを期待している私だなあとつくづく思いました。

「恩に報いる」生活と言われ、〝恩返し〟など所詮出来ない者（私）でしかないと言いながら、感謝、慚愧をしていますと主張するかのようにお念仏をして、救いという見返りを期待していたのではないかと思います。が、「虚礼廃止」とも言われる世の中で、「親鸞聖人報恩講」をはじめ、仏事（法要）は、そうならないようにつとめて参りたいと思います。

『アジャセ王の救い　王舎城悲劇の深層』　鍋島直樹氏著

絶望以上の現実を知る

私もこの歳になるまでには、いろいろな問題が次から次へと起こり、本当に行き詰まりを感じたことがありましたが、その時に、私の先生がお話しなさっていた「絶望以上の現実があるんだ」という言葉に出遇いました。

「お前は現実に絶望したと思っているけれど、お前の絶望以上の現実というものがあるんだ」というのです。

私たちは現実に絶望し、絶望以外の何ものもなくなると思うのですが、「この人生、お前さんが絶望しようとしまいと変わることなく動いていく現実があるんだ。その現実というものにしっかり立って生きた人がたくさんいるんだ」とその歩みをいろいろと教えてくださいました。

また、私にとってその人との出遇いが、非常に忘れられないこととして心に残っており、よくお話しすることがあるのですが、ちょうど、教徒のご本山(お東)でいろいろな問題が起こりまして、全国の門信徒の方々も共に京都に集まって問題に取り組んだ時がありました。

私などもご本山の前に座り込み、道を歩いている人々から「坊主のくせに何をしている」と唾を吐きかけられたこともありました。また、その頃は京都で衣を着てタクシーに乗りますと「オッサン何宗だ」と聞かれ、「真宗だ」と答えると、「真宗か」とそれから必ず説教がはじまるのです。

ある寒い日、ご門徒の一人が亡くなり、枕経に参りまして、終バスの時刻が近かったので、バス停の椅子に缶ビールをチョビチョビ飲みながら、近づいていく私をチラチラ見ている壮年の人がいるのです。

こらまた何か言われるなと思って恐る恐る近づいて行きましたら、案の定「オッサン、何宗や」とこう聞かれたのですね。そらはじまったと思いまして、それでも「真宗大谷派」と言いましたら、しばらく黙って「真宗ちゅうのは親鸞か」と言われるのです。「そうです」と言いましたら、「親鸞ちゅうのは凄いな」とおっしゃるのです。「あれっ」と思いました。それからこっちは終バスは気になるし、お腹は減ってくるし、寒いし、早く帰りたかったのですが、その人はもうちょっと話を聞いてくれと私の衣の袂を握って話してくださらなかったのです。

その方の話によりますと壊疽という足の指から腐っていく病気で、その度に切断しなければならないと言われ、それで何回も入退院を繰り返しているうちに、解者はクビになり、奥さんはどこかに行ってしまわれたそうなのです。嫁にいっている娘の居場所だけは判っているけれど、とてもじゃないが顔を出せない。

それで「俺はもう絶望だ」と、何度も死のうと思って京都の町をうろついたが、なかなか死ねない。ある時やっぱりうろついていた時、人がゾロゾロ入って行く所があって、わけも分からずともかくくっついて中に入ったら、それが親鸞の話を聞く会だった。

話はチンプンカンプンで何も分からなかったけれども、何か惹かれるものがあって、それから看板が出るたびに行った。そしてただ一つ分かったことは、人間が絶望するってことはこんなチャチなことじゃないということだった、そういうことをとつとつと聞かせてくださいました。

つまり、その方は人生に絶望したと思い詰めておられたわけですが、「人間が絶望するというのはこんなチャチなことじゃないということだけは、親鸞さんによって教えられた。だから俺はもう一度、親鸞さんの目で生き直してみようと思っている」ということを一生懸命に話してくださったのです。

どういうところにそういうことを感じられたのかは分かりませんが、もう絶望だという思いの行き詰まりの中で、たまたま親鸞という人の生きぬかれた姿、そういうものに触れた時に、何か人間が人生に絶望するということは、こんなチャチなことじゃないと感ずるようなものを、親鸞聖人の生涯に聞きとられたのでしょう。

何かそういう行き詰まりの体験、その行き詰まりの中で、実は初めて私たちの思いを超えたいのちの事実に出遇うということがあるわけです。また、そういういのちの事実に目覚め、いのちの事実に生きている人にはじめて頷くということがあるのです。「後生」というのは、結局そういう思いの行き詰まりの中で、文字通り「我がいのち」を生きていた私たちが、「もとのいのち、もとの阿弥陀のいのちに帰せよ」とはじめて呼び返される。そういうところに「後生の一大事」を尋ねるという意味がおさえられるかと思います。

(『後生の一大事』宮城顗氏著)

我行精進　忍終不悔

(我が行、精進にして、忍びて終に悔いじ。

宮城氏は、「何を悔いないのか、何を忍ぶのかというと、自らの願い、願ったごとくに力を尽したにもかかわらずすべてが徒労に終わる。その空しく終わることに堪え忍ぶ、しかも悔いない、これが願です。とも仰っておられる。よくよく味わいたいと思います。